

經、儀軌、次第

川崎 一 洸 (一 洋)

1 はじめに

智山伝法院では現在、「教学を再考する」というテーマの下、総合研究会の場が設けられている。平成二十五年九月九日には、高野山大学の佐藤隆彦教授を講師にお招きして「東密における講義と伝授」という内容で第一回の講習会が開催され、佐藤教授には、大師御作ともされる『真言伝授作法』を資料として、古来よりの伝授の在り方をわかり易く解説していただいた。

さて、かつては四度の伝授に際して、次第の伝授とともに儀軌の伝授が行われ、小野の法流では、十八道には『如意輪念誦儀軌』、金剛界には『蓮華部心儀軌』、胎藏(界)には『青龍寺儀軌』、護摩には『瑜伽護摩儀軌』の引き渡しが行われていたようである。

われわれが一座の行法に用いる種々の次第には、その基礎となる儀軌が存在し、さらに金剛界、胎藏の両部の大法に至っては、『金剛頂經』、『大日經』という所依の經が存在する。先徳たちは両部の大法を修するに当たり、両部の大經や儀軌を十分に研鑽されてから修法に臨まれたものと思われるが、現在ではその伝統が失われつつある。

本稿では紙幅の都合上、金剛界法、胎藏法の兩次第の中からそれぞれ、五相成身觀と五字嚴身觀の觀法を取り上げ、經から儀軌へ、儀軌から次第へと展開する中でどのように内容の変化が生じたかを確かめることによって、經、儀軌、次第を総合的に学ぶことの重要性を指摘したい。すでに先行研究も多い五相成身觀と五字嚴身觀に再び注目したのは、両者が即身成仏につながる重要な觀法であるからである。

2 金剛界法および胎藏法の次第の成立過程

『金剛頂經』の漢訳テキストには、十八会十万頌の広本、施護三藏訳の三十卷本（大正八八二番）、不空三藏訳の三卷本（大正八六五番）が知られるが、真言密教で単に『金剛頂經』といえは、三卷本を指す。

三卷本『金剛頂經』の内容は、①序分、②五相成身觀の説示、③金剛界三十七尊の出生、④一切如来の集会（金剛界曼荼羅の完成）、⑤灌頂作法、⑥悉地成就の作法、⑦大・三・法・羯の四種印の説示、⑧諸儀則からなり、大日如来や金剛薩埵を登場人物として、一つの物語として全体が構成されている。

それに比べ、成立年代が少し早い『大日經』は、全体に統一性を欠き、特に第二品の「具緣品」以下は、当時の密教行者たちによって行われていたさまざまな成就法を寄せ集めて構成されている。また、『大日經』の漢訳テキストは全体が七卷三十六品よりなるが、そのうちの第七卷の五品は独立した一種の儀軌である。⁽²⁾ なお、『大日經』の前後六卷に説かれるさまざまな成就法は、①胎藏曼荼羅の觀想と建立、②文字の觀想と布置、③尊格の觀想と念誦、の大きく三種に分類することが可能である。

『金剛頂經』、『大日經』に説かれるこれら種々の觀想法や成就法、曼荼羅建立の作法を、インドの賓客接待の儀礼になぞらえた「供養法」の体系の中に組み込むことによって、金剛界法、胎藏法の儀軌が成立し、さらにわが国において、修法の実修に適するように儀軌を整理して、諸々の次第が編纂された。

金剛界法に関する漢訳儀軌には、金剛智三藏訳『略出念誦經』（大正八六六番）、同『毘盧遮那三摩地法』（大正八

七六番)、不空三藏訳『蓮華部心儀軌』(大正八七三番)などがあるが、わが国の金剛界法の次第成立の基盤となったのは、『蓮華部心儀軌』(具名『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』)である。宗祖大師は『蓮華部心儀軌』に基づき、三巻本の『金剛頂経』や他の儀軌をも参照して『金剛界黄紙次第』(別称『金剛界梵字次第』、『金剛界奥旨次第』)を編まれた。

一方、胎藏法の本軌は、『供養法次第』と呼称される『大日経』の第七卷である。大師はこの第七卷を基盤に、金剛界系の『蓮華部心儀軌』などを参酌して、『胎藏梵字次第』を編まれた³⁾。なお、いずれも大師より後の請求であるが、わが国の胎藏法の次第の成立に大きな影響を与えた漢訳儀軌に、『胎藏四部儀軌』と呼ばれる四種の儀軌がある。いずれも長いタイトルを有するので略称で示せば、a)『撰大儀軌』(大正八五〇番)、b)『广大儀軌』(大正八五一番)、c)『玄法寺儀軌』(大正八五二番)、d)『青龍寺儀軌』(大正八五三番)の四本であり、a)とb)は善無畏三藏の訳、c)とd)は惠果和尚の孫弟子に当たる法全阿闍梨の撰とされている。日本密教では特に、最も整備された『青龍寺儀軌』が珍重された。

以上に示した漢訳儀軌や大師御作の次第を基本に、わが国では各時代の阿闍梨たちの意樂を反映させて、金剛界法、胎藏法のさまざまな次第が編纂されてきたが、幸心流においては、伝授には延命院元杲僧都作の『金剛界念誦私記』および『胎藏念誦私記』を、加行には、それらを実修に則して簡略にした成賢僧正作の『金剛界念誦次第』および『胎藏界念誦次第』を用いる習いであり、元杲僧都の次第は『広次第』、成賢僧正の次第は『都督次第』と呼ばれている。なお、元杲僧都の『金剛界念誦私記』の底本となったのは、聖宝尊師から灌頂を受けた長慶阿闍梨が編んだいわゆる『神楽岡次第』であり、また『胎藏念誦私記』は、元杲僧都が石山の淳祐内供より『青龍寺儀軌』の伝授を受け、内供の次第を基礎として、大師の『胎藏梵字次第』や『大日経』の第七卷、『蓮華部心儀軌』などを参酌して編纂されたものとされている。

【表1】両部大法に関する経、儀軌、次第

	経	儀軌	次第（大師御作）	次第（幸心流）
金剛界法	『金剛頂経』	『蓮華部心儀軌』	『金剛界黄紙次第』	（長慶 『神楽岡次第』） 元杲 『金剛界念誦私記』 成賢 『金剛界念誦次第』
胎藏法	『大日経』	『大日経』第七卷 胎藏四部儀軌 （特に『青龍寺儀軌』）	『胎藏梵字次第』	元杲 『胎藏念誦私記』 成賢 『胎藏界念誦次第』

3 五相成身観

（1）『金剛頂経』に説かれる釈尊成道の物語

『金剛頂経』の冒頭は、序分に続き、一切義成就菩薩が菩提道場で阿婆頗那伽三摩地と呼ばれる苦行を行っている場面から始まる。

そこに、大宇宙に遍満する一切如来が雲集してやって来て、「真実を知らずして、どうしてそのような苦行によって悟りを得ることができようか？」と菩薩に問いかける。

驚いた菩薩は、「如来たちよ、その真実とは何なのですか？どのように修行すればよいのでしょうか？」と質問する。すると一切如来は、菩薩に五相成身観の観法を教授し、その観法を実践するや否や、菩薩はついに悟りを得て成仏するに至る。

この物語が仏伝を意識していることは明らかであり、「一切義成就（サルヴァ・アルタ・シッデイ）」という名の菩

薩は、成道以前の積尊の御名シツダールタ（シツダ・アルタ）に重なっている。また、「阿婆頗那伽（アースパーナカ）」とは、釈尊がウルヴィルヴァアの森で行った呼吸を停止する苦行の名称であるが、『金剛頂經』では、菩薩は「菩提道場」すなわち菩提樹下の金剛宝座においてその苦行を行ったという設定になっている。つまり『金剛頂經』は、釈尊は、大日如来の分身である一切如来によって授けられた密教の瞑想法である五相成身觀を實踐することによって仏陀となった、と主張するのである。

『金剛頂經』において五相成身觀は、一切如来と菩薩のやり取りによって以下のように説かれている（取意）。なお『金剛頂經』自体に「五相成身觀」という名称が現れるわけではなく、五段階の觀法と五種の真言が説かれることから、後世このようにように呼ばれるようになった。インドやチベットでは、「五種現等覺」などと称されている。

①まず一切如来が、一切義成就菩薩に自心を觀察するように勧め、「*oṃ citāpratyvedhāṃ karomi*」（オーム、私は心の洞察をなす）」という真言を授ける。そして菩薩が真言を誦じて心を觀察すると、自身の心が月輪として浮かび上がる。（通達菩提心）

②次いで一切如来は、その月輪としての心が、光り輝く自性清浄な心であると觀想するように告げ、「*oṃ bodhicittam upādāyāmi*」（オーム、私は菩提心を発こします）」という真言を授ける。そしてそれらを実践すると、菩薩の心はくつきりと明瞭な満月輪となる。満月輪は、菩提心の象徴である。（修菩提心）

③ついで一切如来は、月輪の上に金剛杵（五股杵）を思惟するように告げ、「*oṃ tūṣha vajra*」（オーム、金剛杵よ、立ち上がれ）」の真言を授ける。菩薩はこの真言を唱え、月輪の上に金剛杵を觀想する。（成金剛心）

④次いで一切如来が「*oṃ vajrāṇamakāṇ*」（オーム、私は金剛を自性としている）」の真言を授け、菩薩がそれを唱えると、宇宙に遍満していた大日如来がその金剛杵の中に入り込み、菩薩は大日如来と一体となる。すると一切如来は、菩薩に「金剛界（ヴァジュラダートウ）」という灌頂名を与え、その名を呼んで讃嘆する。（証金剛身）

⑤菩薩は三十二相八十種好を具した如来の身体を得て、一切如来はさらに「*oṃ yathā sarvathāgataḥ tathā*」（オーム、

ーム、一切如来のように、そのように私もある」という真言を授け、菩薩がこの真言を唱え、菩薩はついに現等覚して仏陀となる。(仏身圓滿)

以上が五相成身観のプロセスであるが、『金剛頂経』が続いて示す物語によればその後、仏陀(金剛界如来)となつた一切義成就菩薩は一切如来の加持を受け、須弥山の頂上にある宝楼閣に移動し、そこで金剛界曼荼羅の諸尊を生ずることになる。

(2) 儀軌における展開

金剛界法の行法では、『金剛頂経』に説かれる一切義成就菩薩が経験した成道の過程を、行者が追体験して行ずることになる。それによつて行者自身も大日如来と一体となり、即身成仏を図るのである。儀軌や次第では、その過程をより明確にイメージするため、五つの段階に対して、新たなプロセスの付加や、内容の変更が行われている。

まず、『蓮華部心儀軌』における展開を見てみよう。当儀軌では、以下の五点の変化が指摘できる。

第一は、『金剛頂経』において否定されるべき苦行の一種であつた阿娑頗那伽三摩地が、五相成身観の前行として修する調息のテクニクとして理解されていることである。「応に結跏趺坐して、支節を動揺することなかるべし。応に等持印を結ぶべし。二羽金剛縛にし、仰げて躋下に安じ、端身にして動揺すること勿れ。舌を以つて上の脛を柱え、息を止めて微細ならしめよ。」と記されており、さらに「諸法の性は皆自心に由る…」と、諸法の空性を観ずるように指示する。「舌を以つて上の脛を柱え、息を止めて微細ならしめよ」は、阿娑頗那伽三摩地が本来、呼吸を制限する苦行であつたことを示す一文である。

第二は、通達菩提心の観想の直前に、普礼の真言が挿入されることである。これは、一切如来からの驚覚を受けて、一切義成就菩薩が成道に至るための真実の説示を請う場面を再現したものであり、菩薩が一切如来に対して行う礼拝である。

第三は、修菩提心の觀想の後に、「オン ソクシマバザラ オム スクスマヤジャ」の眞言が挙げられていることである。ここでのような觀想を行うべきかの記述はないが、後の広觀、斂觀へとつながるプロセスであると思われる^④。

第四は、心月輪の中に觀想される五股金剛杵が、金剛蓮華に変更されている点である。よって成金剛身の眞言がオン チシユタ バザラハントマ オム ウシタ ヴァジャパダマ（オーム、金剛蓮華よ、立ち上がれ）に変化する。『蓮華部心儀軌』が、そのタイトルからもわかるように、蓮華部の尊格を成就するために編纂された儀軌であるからである。なお、日本の金剛界法次第もこの『蓮華部心儀軌』の説を継承しているため金剛蓮華の觀想を説くが、本来、金剛界大日如来を成就するためには、五股金剛杵を觀想しなくてはならない。

第五は、仏心円満の觀想の後に、如来加持の眞言「オン サラバタケケタヒサンボウチチリチャバザラ チシユタ オン サヴァタハガタハサンボウチチリチャバザラ オム サヴァタハガタハサンボウチチリチャバザラ チシユタ オム サヴァタハガタハサンボウチチリチャバザラ チシユタ」が説かれることである。これは、成道した一切義成就菩薩が、一切如来に加持される場面を一つの眞言で表現したものである^⑤。

(3) 次第における展開

大師御作の『金剛界黄紙次第』は、五相成身觀の觀法に関しては『蓮華部心儀軌』の記述をほぼそのままの形で引用しており、長慶阿闍梨の『神楽岡次第』、元杲僧都の『広次第』も大師の説を踏襲している。『都督次第』においても、觀文がいくらか省略されているが、構成において変化はない。

なお『金剛界黄紙次第』では、儀軌に比してさらに工夫が加えられており、次の三点において新たな展開が見られる。

第一は、調息法としての阿娑頗那伽三摩地の眞言として、「オン サマダパドメ キリク オン サマダパドメ キリク オン サマダパドメ キリク」が加えられていることである。この眞言は、『蓮華部心儀軌』と同じく五相成身觀の觀法を説く『千手儀軌』（『大正蔵』二〇・七四上）、『金剛王儀軌』（『大正蔵』二〇・五七二中）などから取り入れられた眞言である。

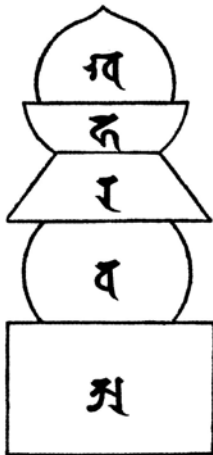
【表2】五相成身觀の構成

	『金剛頂經』 〔大正藏〕一八・二〇七下)	『蓮華部心儀軌』 〔大正藏〕一八・三〇一下)	『金剛界黃紙次第』 〔弘法大師全集〕二・二〇八)
妙觀察智	苦行としての阿婆羅那伽	調息としての阿婆羅那伽	om samādhipadme hrīḥ
①通達菩提心	om citaprativedhaṃ karomi	om sarvatathāgatāpādāvandanam karomi (普札)	om sarvatathāgatāpādāvandanam karomi om a svāhā (阿字) (普札)
②修菩提心	om bodhicittam upādāyāmi	om bodhicittam upādāyāmi om sūksmavajra (微細金剛)	om bodhicittam upādāyāmi
③成金剛心	om tīṣṭha vajra	om tīṣṭha vajrapadma	om tīṣṭha vajrapadma om sphara vajra (法金剛) om sarīhara vajra (斂金剛)
④証金剛身	om vajratomako 'ham	om vajrapadamtomako 'ham	om vajrapadamtomako 'ham
⑤仏身圓滿	om yathā sarvatathāgatās tathā 'ham	om yathā sarvatathāgatās tathā 'ham	om yathā sarvatathāgatās tathā 'ham
諸仏加持		om sarvatathāgatābhīsam bodhicīdīḥavajra tīṣṭha	om sarvatathāgatābhīsam bodhicīdīḥavajra tīṣṭha

身体	色	形状	象徴	種子	輪
頂上	青	宝珠	虚空	kha	空
眉間	黒	半月	因	ha	風
胸	赤	三角	過失	ra	火
臍	白	円	語	va	水
下半身	黄	方	本不生	a	地

【表3】五字嚴身観

(1) 『大日経』に説かれる五字嚴身観の諸要素
 五字嚴身観は、行者の身体に地、水、火、風、空の五輪・五大を象徴する五種の種子や図形を布置し、大宇宙としての大日如来と入我我入を図る成就法である。その体系をまとめたものが表3であるが、『大日経』の本編に、このように整理された形での五字嚴身観の観法が説かれているわけではなく、断片的な記述が見られるのみである。



4 五字嚴身観

第二は、成金剛心の真言の直前に、「^{オン} a sūtra (オーム、阿字よ、スヴァーハー)」の真言が付加される点である。月輪観や阿字観を説く『大日経』系の文献から取り入れられたものであるうか。
 第三は、成金剛心の観想に続いて、『蓮華部心儀軌』で説かれた「^{オン} sukṣmavajra (オーム、微細金剛よ)」の真言に代わって、広金剛、斂金剛の二種の真言と観想が加えられている点であり、「是の二つは口決なり」と割註が記されている。これらは、月輪の中に思惟した金剛杵のイメージをより明確にするための技法で、金剛智三蔵訳の『略出念誦経』などに説かれている(『大正蔵』一八・二三三七中)。

『大日経』「秘密漫荼羅品」には、曼荼羅を描くための前行として「真言者は円壇を先ず自体に置き。足より臍に至るまで大金剛輪（地輪）を成じ、此れより而も心に至るまで当に水輪を思惟すべし。水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり。」（『大正蔵』一八・三一上）と、空輪を除く四輪の布置観が説かれている。

また「阿闍梨真実智品」には、阿闍梨が知るべき真実として、五大の種子が「阿字（ a ）は第一命なり、嚩字（ va ）を名づけて水と為す。囉字（ ra ）を名づけて火と為し、咩字（ ma ）を忿怒と名づく。佉字（ ka ）は虚空に同じ、所謂極空の点なり。」（『大正蔵』一八・三八中）と説明されている。ただし、風大の種子に代わって忿怒の種子 ra が挙げられている。

そして、最もまとまった記述が見られるのは、「悉地出現品」である。当品では長い偈文によって「布想」すなわち布置観が説かれるが（『大正蔵』一八・二〇中）、その中に、①阿字（ a ）を大因陀羅輪（地輪）として下身（足）に、②白い嚩字（ va ）所成の円形の水輪を臍に、③囉字（ ra ）所成の赤い三角形の火輪を心（胸）に、④訶字（ ha ）所成の深青の半月形の風輪を眉間に観想することが記されている。⑤佉字（ ka ）についても言及されるが、単に「最勝にして虚空の空なり」と述べられるのみで、身体の中の場所に布置するのは説かれていない。

（2）『大日経』第七巻の記述

以上のような『大日経』本編に説かれる断片的な記述を、体系的な五字嚴身観の観法にまとめたのは、儀軌としての性格を有する『大日経』の第七巻である。第七巻の「持誦法則品」には、大日如来との入我我入を成就する瑜伽観法として左記のような記述がある。さらに、その実践の功德が「五字を以って身を飾れば、威徳具に成就す。」と記されており、この一文が「五字嚴身観」という観法の名称の由来になったものと思われる。なお第七巻では、五字嚴身観に続いて、いわゆる百光遍照王の観法が解説される。

「本尊の瑜伽に住して、加うるに五支の字を以つてす。下体と及び臍の上と、心と頂と眉間となり。三摩呬多に於

いて、運相して而も安立すべし。是の法に依つて住するを以つて、即ち牟尼尊に同じ。阿字(ə)は遍く金色なり。用いて金剛輪と作して、下体を加持す。説いて瑜伽座と名づく。鏤字(yam)は素月の光にして、霧聚の中に在り。自の臍の上を加持す。是れを大悲水と名づく。嚙字(yam)は初日の暉にして、形赤にして三角に在り。本心の位を加持す。是れを智火光と名づく。哈字(han)は劫災の焰のごとく、黒色にして風輪に在り。白毫際を加持す。説いて自在力と名づく。佉字及び空点(khan)は、一切の色を相成し、加持して頂の上に置く。故に名づけて大空と為す。』(『大正蔵』一八・五二中)

この記述において、金剛輪(地輪)および空輪の形状は示されず、阿字(ə)を除く四字に空点が付されているが、表3に示した現行の五字嚴身觀の諸要素がほぼ出揃っている。⁽⁶⁾

なお、『大日經』第七卷のチベット語訳を参照すると、この部分にはさらに、*namaj samantabuddhanam* (あまねく諸仏に帰依いたします)の帰命句に *āḥ·van·ran·han·khan* の五種子をそれぞれ加えた五種の真言が記されている。漢訳では「此の五種の真言心は第二品の中に説けり」という註記があり、これらの真言が省略されているが、第七巻と同本異訳ともされる『要略念誦經』にも、これらの五種の真言が記されている(『大正蔵』一八・六一中)。後述するように、これら五種の真言は日本の胎藏法の次第において再び注目されることになる。

(3) 胎藏四部儀軌における観法

次に、胎藏四部儀軌における五字嚴身觀に関する記述を検討しよう。

『撰大儀軌』では、胎藏大日如来の真言として知られる「満足句の真言」すなわち *namaj samantabuddhanam a vīra hūm khan* (あまねく諸仏に帰依いたします。ア、勇者よ、フーム、キヤム) がまず説かれ、それに付随する形で「秘密漫荼羅品」の「真言者は壇壇を先ず自体に置け。足より臍に至るまで大金剛輪を成じ、此れより而も心に至るまで密漫荼羅品」の「真言者は壇壇を先ず自体に置け。足より臍に至るまで大金剛輪を成じ、此れより而も心に至るまで」に水輪を思惟すべし。水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり。』の偈頌が引かれている(『大正蔵』一八・八三

下)。

満足句の真言は、真言中に「勇者(vira)」の語を含むことから「大勤勇の真言」とも呼ばれる。『大日経』によれば、勇者とは大日如来のことであり、また四魔を降伏して現等覺を果たした瞬間の積尊のことであり、両者は同体とされる⁽⁸⁾。よって、この真言と五字嚴身觀が一具として説かれるということは、『撰大儀軌』では、五字嚴身觀が胎藏大日如来を成就するための瑜伽觀法として考えられていることがわかる。なお、満足句の真言の a vira hūn khan の部分は、五大の種子である a·va·ra·ha·kha より派生したものであり、そのことも、この真言と五字嚴身觀が一具にされた理由の一つであると考えられる⁽⁹⁾。

『広大儀軌』では、『大日経』第七卷の五字嚴身觀を説く部分が、「悉地出現品」の記述を加味してやや増広された形で引用されるが、第七卷のチベット語訳や『要略念誦経』に見られた五種の真言も記されている(『大正藏』一八・九一下)。その直後には、いわゆる「虚空藏転明妃」の真言の後半部分のみが説かれるが、「世尊、降伏四魔三昧に入り、説くに満足句を以つてす。」とあることから、これは満足句の真言を誤って記したものと思われる。

『玄法師儀軌』と『青龍寺儀軌』はともに法全阿闍梨の撰であり、五字嚴身觀に関する記述は共通している(『大正藏』一八・一一〇中、同・一四六中)。まず、漢訳の『大日経』第七卷の五字嚴身觀を説く部分がそのまま引用され、「復た満足句を念ぜよ」として namdji samantabuddhanam a vani ran han khan の真言が説かれるが、一般的な満足句の真言とは異なり、a vira hūn khan の部分が a vani ran han khan となっている。この真言は、『大日経』第七卷のチベット語訳や『要略念誦経』が説く、婦命句に五輪の種子をそれぞれ付した五種の真言の一つにまとめたものと思われる。いずれも大日如来の真言であるが、前者が四魔を降伏する勇者(大勤勇)としての大日如来を称える真言であるのに対し、後者は、五大・五輪をその身体とする大宇宙そのものとしての大日如来を讃嘆する真言となっている。

さらに両儀軌では、満足句の真言に続いて「器世界を安立せよ。空と風を最も下に居け。次に火と水と地とを觀ぜよ。是の輪(地輪)は金剛と同じくして、大因陀羅と名づけ、火焰の淨金色なり。」と、器界觀が説かれている。こ

れは、五字嚴身觀によって行者の身体に五輪を觀想し、さらに器世界を五輪として觀想することにより、身体と器世界がバラレルなものととして、そのまま大日如來に等しいことを觀するためのプロセスである。ここに、行者Ⅱ五大・五輪Ⅱ大日如來の理論が成立するのである。

(4) 次第における展開

大師御作の『胎藏梵字次第』では、「五輪觀」という見出しがあり、まず以下のような一文が記される。

「我が心月輪の上及び道場の中に各^{ラン}raṅ字有り。下毎に^{ヤン}saṅ字有り、変じて風輪となる。大地の火輪を吹き発こして自心及び道場の地中の不淨過患を燒淨し、皆悉く無為の大空界と成す。

只心月輪のみ有りて、其の上に^アa・van・^{ラン}ran・^{ハン}han・^{ケン}khanの五大の字有り。吾身と成る。其の形薩埵の如し。大魔も障を成すこと能わず。」(『弘法大師全集』二・二五二)

この文の前半は、一種のラン字觀を示したものであり、風輪によって煽られた火輪が、行者の心と道場、兩者の不淨過患を燒淨すると觀想するのである。なお幸心流の『広次第』、『都督次第』では、作壇作法の前に修される「住定印」の觀法がこのラン字觀に相当する。

そして、文の後半部に示された觀法が狭義の五字嚴身觀に相当するが、身体の五処ではなく心月輪の上に五大の子を觀するところが特異である。五大の種子は、阿字(ॐ)以外の四字に空点を付した『大日經』第七卷所説のもの採用されている。「大魔も障を成すこと能わず」が、大勤勇の大日如來を表す文言であることは明らかである。

次いで大師の次第では、^{ノウミク}namah samantabuddhānāmの歸命句に^アa・van・^{ラン}ran・^{ハン}han・^{ケン}khanをそれぞれ加えた地輪、水輪、火輪、風輪、空輪の五種の真言が示されるが、先に見たように、これらの真言は『大日經』第七卷のチベット語訳や『要略念誦經』に説かれていた。さらに大師は、それぞれの真言に対し、結ぶべき個別の印契を定めておられる。¹⁰⁾

『胎藏梵字次第』では、続いて百光遍照王の観法が示される。これも、『大日経』第七卷の規定に基づくプロセスであるが、そこに示される真言 *namah samantabuddham an* もまた、大日如来の真言である。そして「次に満足句」として、*a van ran han khan* の五字真言が挙げられ、直後に「自身即ち如来なり」と、即身成仏の完成を示す一文が記されている。このように大師の次第では、ラン字観↓狭義の五字嚴身観↓五輪の印明の結誦↓百光遍照王↓満足句の真言（五字真言）と、重層的に数種の観法を重ねて大日如来との一体化を図ってゆく。

以上のような広義の五字嚴身観の観法に関する記述が終わると、続いて器界観の観法が説かれるが、ここではまず、下から上へと順に、空輪（雑色・円形）↓風輪（黒色・半月形）↓火輪（赤色・三角形）↓水輪（白色・円形）↓地輪（黄色・方形）と、五輪を逆に観じて器世界を建立する観法が示される。これは、『俱舍論』などが説く伝統的な風輪・水輪・金輪（地輪）の三輪説に、火輪と空輪を加えたもので、『大日経疏』にこの器界観に関する詳しい説明が見られる（『大正藏』三九・四三中）。

一方、小野の法流に属する元杲僧都の『広次第』では、五字嚴身観は完全に道場観の一部分として扱われている。

『広次第』では五字嚴身観に関して、道場観の観文の冒頭に「定印を作して観念せよ。先ず五支の字を以て身に布する。a字を下体に布す。黄色にして地輪なり。van字を臍下に布す。白色にして水輪なり。ran字を心位に布す。赤色にして火輪なり。han字を毫際に布す。黒色にして風輪なり。khan字を頂上に布す。衆色にして空輪なり。」という簡略な記述があるのみであり、続いて乳海↓大智焰↓八葉蓮華王↓須弥山の順で器世界の観法が示される。

成賢僧正の『都督次第』でも『広次第』と同様、道場観の冒頭に「a字下体に有り。黄色地輪なり、方形。van字臍輪に有り。白色水輪なり、円形。ran字心位に有り。赤色火輪なり、三角。han字眉間に有り。黒色風輪なり、半月。khan字頂上に有り。衆色空輪なり、団形。我既に五大所成遍法界の身なり。」と記されるのみで、新たに五輪の形状が示されているものの、この簡略な観法をもつて五字嚴身観としている。

なお周知のように、『都督次第』に含まれる道場観の観文は、覚俊阿闍梨の『大谷道場観』の趣旨を取り入れたも

のであるとされている。『大谷道場觀』と『都督次第』を比較すると、右に引用した五輪布置の觀文は同一であるが、『大谷道場觀』では五輪の種子として、空点を除いた a・va・ra・ha・ka の五字が用いられている。また『大谷道場觀』では、五輪の布置に続いて、「五大の印を結ぶべし」として、大師の『胎藏梵字次第』に挙げられた五種の眞言と五種の印契が記されている。¹²⁾ 成賢僧正は『都督次第』を編纂する際、この五輪の印明を省略されたものと思われる。

5 おわりに

以上、『金剛頂經』と『大日經』それぞれを代表する瑜伽觀法である五相成身觀および五字嚴身觀について、經、儀軌、次第を対照してその記述の比較を試みた。

經から儀軌へ、そして儀軌から次第へと展開する過程において、五相成身觀については、新たなプロセスが加えられ、より具体的な觀想法が整備されていたことがわかるが、『金剛頂經』において捨てるべき苦行として示される阿婆頗那伽三摩地を調息の技法として捉えるなど、換骨奪胎した例も見受けられる。一方、五字嚴身觀に関しては、『大日經』に散説される関連する成就法を整理しながら、儀軌において体系的にまとめとめてゆくという傾向が見られ、心流所用の次第では、道場觀の一部として極めて簡略化されていた。そのような傾向は、『金剛頂經』に比して『大日經』が未整備な經典であることにも由来するであろう。

いずれにしろ、儀軌や次第に記される個々の觀法や一印一明には、所依となる經の多くの教説が凝縮して象徴させられている。また、儀軌が整理されて行用のための次第が編纂される際には、印契や眞言のみがピックアップされ、多くの説明の文言や觀文が省略される傾向にある。

よって、われわれが次第を用いて修法を実修する場合、一印一明の深義を読み解くために儀軌の伝授は不可欠であり、金剛界法、胎藏法を修するに際しては、さらに『金剛頂經』、『大日經』の学習が必須とされるのである。

〈キーワード〉五相成身觀 五字嚴身觀 四度次第 金剛界法 胎藏法

註

- (1) 広本の『金剛頂經』は、不空三蔵の『金剛頂經瑜伽十八会指帰』(大正八六九番)などにその概要が記されるのみで、その全体が現存するわけではない。
- (2) 『大日經義釈』は善無畏三蔵が北インドのウデイヤーナで『大日經』第七卷を撰述したとし、新羅の僧・不可思議が著した第七卷の註釈書『大毘盧遮那經供養次第法疏』(通称『不思議の疏』)の序文には、ガンダーラの王の要請を受けた善無畏三蔵がカニシカ王建立の仏塔を供養したところ、第七卷の原典が空中に現れたと記されている。
- (3) 大師の御作とされる胎藏法の次第に『五輪投地次第』、『作礼方便次第』、『普礼五三次第』、『備在次第』などがあるが、実際には『青龍寺儀軌』や宗叡僧正の伝えた口決の影響が見られるなど、後世の成立であるとされる。
- (4) 微細金剛の觀想法は、不空三蔵訳の三卷本『金剛頂經』には含まれない、三十卷本『金剛頂經』の「金剛界品・金剛智法曼拏羅廣大儀軌分」に説かれている。
- (5) 金剛智三蔵訳の『略出念誦經』では、証金剛身の真言の末尾に接続してこの真言が説かれている(『大正蔵』一八・二三七下)。
- (6) 『大日經疏』の「秘密漫荼羅品」の解説箇所には、金剛輪と空輪を含めた五輪の形状が揃って説かれている(『大正蔵』三九・七二七下)。
- (7) チベット大蔵經には、『大日經』第七卷が、作者名を有する独立した一儀軌として収録されている。東北二六六四番。
- (8) インドやチベットでは、胎藏大日如来は仏身論の上で「現等覺身」とされ、『大日經』は「毘盧遮那現等覺タントラ」と呼ばれる。
- (9) わが国において満足句の真言は、五大の種子 a・va・ra・ra・kha との関係から、五字に分解して a vi ra hum kham と綴られることが一般的である。
- (10) 地輪に外五股印、水輪に八葉印、火輪に法界生印、風輪に転法輪印、空輪に大恵刀印を定める。
- (11) 『大谷道場觀』は、智積院発行『広次第』の付録(智山書庫所蔵の写本の影印版)を用いた。その表紙には「胎藏道場觀 大谷隆瑜」とある。
- (12) ただし、『胎藏梵字次第』が外五股印とする地輪の印契を『大谷道場觀』は内五股印とする。